

日本の四季は美しい。春は桜、夏はひまわり、秋は紅葉、冬は雪だ。今は真冬だが、ちょっと遡って、紅葉の話をしたい。紅葉は気温の変化によって、葉の色が変わる。けれども、色の変化は、いつの間にか始まる。葉っぱの色がいつから変わり始めたのか、全然気づかなかったし、その木の本来の姿も思い出せなかった。それは、聖霊によって、クリスチャンが変わっていくことと似ている。理論的には、誰かが信仰を持ったら、聖霊様は、その瞬間からその人を造り変え始める。実際には、クリスチャンになって変わり始めていることに、周りの人々がいつ気づくのか、変わる前はどんなだったかは、なかなか思い出せない。しかし、けっこう変化があるのには、違いない。信仰の体験、つまり、聖霊による体験は、いつの間にか少しずつあった。最初は気がつかないかもしれない、時間が経ったら、内面から、表面まで、変化したことは、自分も周りの人々も感じられるはずだ。

ガラテヤのキーワードのひとつは聖霊だ。5:22-23の聖霊の実に関するみ言葉は有名だ。3:1-14の中に、4回、御霊という言葉がある。2節の「聖霊を受け」とか、3節の「聖霊によって始まり」とか、5節の「あなたがたに聖霊を与え」などは、クリスチャンの信仰の始まりから、信仰生活をおくる力もすべて聖霊の働きなのだを示す。14節を見ると、パウロは信仰と御霊との繋がりを教える。キリスト・イエスを信じる信仰を持っているなら、神様が約束されている御霊を頂く。

エペソ人3:16に、パウロが祈る時、聖霊の力により強くなるようにという祈りを捧げた。「どうか父がその栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいように。」パウロが求めているのは聖霊の力だ。ローマ8:24で、「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。」と励ましている。聖書の教えに従い、信仰の生活をおくりたいなら、聖霊によって、私たちの内なる人を強くしていただくのは大変重要だ。内なる人というのは、心の力だ。1. 理性。人間の理性と考える意識。2. 良心。善と悪を分けられる心。3. 意志。行為を選択したり、行ったりする力。聖霊様が与えてくださる力は私たちの理性によって、良心を使って、行う力を強くしてくださる。御霊は私たちの考える意識を導き、私たちが善と悪を分ける場合に助けを与え、私たちが正しい行為を選んでいる時や行う時を守る。聖霊の働きのうちに、導き、助け、守りがある。それは、「み」、「た」、「ま」です。

3:1-14の中に他の二つのキーワードがあり、信仰と律法だ。そ信仰と律法が対立している。ガラテヤ人1章から、パウロははっきりガラテヤの信徒たちの間違いを指摘し、ガラテヤ人はキリストの信仰による福音から離れ、律法主義という間違った方向に行ってしまった。2章後半から、パウロは三つの論拠を語って、その問題に対応する。

- 1) パウロは自分の証しを用いて、信仰によって義と認められるという立場を述べた。(2:15~19)
- 2) クリスチャンが聖霊を受け入れ、神様の素晴らしさを体験していた経験を語る。(3:1~5)
- 3) アブラハムが義と認められたことから説明する。(3:6~14)

1. 信仰によって義と認められるガラテヤ2:15-16、パウロは自分の証しを用いて、イエス・キリストを信じることによって義と認められるということを証明する。信じることによって義と認められるというのは、「信仰義認」だ。「人は信仰によってのみ神から正しいと認められる」、「神の前で罪人である人間が義と認められるのは、信仰のみによる、行いによるのではない」。人間は誰も神の前で罪人であり、その罪責を償わなければならないが、それができないので、罪がないキリストが罪人である人間に代わって十字架に架かれ、罪を贖ってくださったという、その事実を受け入れる信仰によって神との間に正しい関係が結ばれるという教理である。

宗教改革の中心人物であり、マルティン・ルターは厳しい修道生活をして、ほぼ毎日のすべての時間に聖書を読む、祈る、などを詰め込んだが、罪を犯さないよう努力し、できうる限りの善行を行ったとしても、神の前で自分は義、自分は正しいものであると確実に言うことはできないと深く感じた。彼はローマを研究する時、人間は善行ではなく、「信仰によってのみ義とされる」という理解に達した。義とされるというのは、すべて神の恵みであるのだということに気づいたのだ。神様に喜ばれるのは、何かをするのではない、イエスキリストが私たちのために血潮を流し、私たちの「身代わり」として死んでくださったので、ただイエス様を信じるならば、神様はその御前に私達を義と認められる。

サタンは、良くウソを使って、私達を欺く。サタンが言葉巧みに、人間が不完全であり、清くないものであるのをいいことに、よく「神様は私達を愛されない」というウソをつく。私達にそれは本当だと思わせて、自分は神様の子どもという身分には、ふさわしくないと疑わせる。その目的は、私達のイエスキリストの十字架の救いに注目している視線を自分の行為に向けてしまい、希望も力も失うようにする。それは、大間違いだ。いつも十字架の救いに注目しよう。

2. 聖霊を受け入れ、神様の素晴らしさを体験を語った。パウロは論拠のインパクトを高めるために修辞疑問という表現を使い、疑問形にはなっていますが、実際には答えがほしくて質問しているわけではない。パウロは疑問文を通して、言いたいことを強めている。3:1-4 からみると、ガラテヤの信徒は確かに、惑わされた。御霊を受けることは、法を守ったからではなく、信仰をもって聞いたからだ。クリスチャンが神様の素晴らしさを体験するのは聖霊を受けた証拠だ。神様の素晴らしさを体験すればするほど、聖霊が共にいることを深く感じ、「信仰によって義と認められる」という大切な真理を証明できる。聖霊を受けた体験は私達が信仰によって義と認められる、ということの大変重要な印となるのだ。

3. アブラハムの義と認められたこと。律法は、人を義と認めることも、救うこともできない。律法にできるのは、有罪の判決を下すことだけだ。人間が律法の行いによるなら、終局は神様から離れる。呪いのもとにある。一つでも戒めを破れば、人は有罪の判決を受ける。すべての律法を守ることは不可能だ。ですから、律法によって神の前に義と認められる者が、誰もいない。「義人は信仰によって生きる」は、大切なターニングポイントだ。呪いの道から永遠の命へ行く道に変わる大切な転換点は、キリストの十字架の救いだ。キリストは十字架に掛けられた時、律法の呪いをご自分に負わせました。キリストがこのことをされたので、わたしたちは罪から解放される。アブラハムは神を信じ、それで、それが彼の義と認められ、神様に喜ばれた。私達はイエスキリストを信じ、信仰によって聖霊を受ける。

聖霊に寄り掛かることによって、与えられる変化だ。クリスチャン生活をおくるための大切な秘訣のひとつは、聖霊に寄り掛かることだ。寄り添うというよりは、寄り掛かるという方がもっと私達と聖霊との関係を適切に描写している。時間がある時に、聖霊に近づくということではない。私達のすべてを聖霊に預ける。イエス様を信じ、クリスチャンになるのは、ただ、ある宗教に入ることではない。聖霊を受け、罪の奴隷から、天地万物を創造される神様の子どもに戻るのは、すべての生き方の変化だ。信じる前の自分で頑張っただけで行かなければならなかったことから、信じてからの聖霊にたよることになる。聖霊にたよることになると、物事に対する価値観も、自分や周りの人に対する態度もすこしずつ変わる。そういう変化はどのくらいの影響力があるか。最初の紅葉の話を知っているか？私達クリスチャンは素晴らしい影響力を持っている。一人の力ではない。一人一人が信仰によって、聖霊様を受け、クリスチャンの交わりの中で互いに励まされ、大変大きな影響力になるのだ。一緒に聖霊のいろに染まることができたら、札幌から、札幌、北海道、全日本、アジア、全世界にも影響を与えられる。